

ダンスモンキーの虚と実

新沢克海

Illustration

05

あの頃の僕にとって、《彼女》の言葉は一種の鎮痛剤のような役目を果たしていたように思う。例えば、こんな言葉――。

「あなたが悩んでいる《それ》については、たぶん、悩む必要はないです。あなたの知っている世界を形成しているのだから結局、あなたと同じ人間なんですから。それさえ分かっていたら、怖がることなく、何ひとつないんです。そんなことよりも、大事な人を失うことの方が、よっぽど怖いです」

当時、僕は世界の奇む奇怪な複雑さや隠蔽された悪意から目を背け、世界から降り注ぐありとあらゆる雑音に耳を塞いでいた。脅迫的な世界から遠ざかることを決め、侵されざる孤独な時間を愛することを誓った。人と会う時は極力平静を装い、何も問題がないように振舞うよう努めた。何もかもが空虚に思えることもあれば、目に映るすべてを憎悪することもあった。限りない自己嫌悪と膨張する猜疑心

が、僕の中の柔らかくも脆い領域をずたずたに切り裂こうとしていた。気だるく、眠れない日々が続いた。

でも、誰にだってそういう時期がある。僕だけが特別なわけじゃない。はしかみたいなものなのだ。そう思っていた。

ある時点において多くの人々は世界と向き合うことを余儀なくされ、選択を迫られる。選択の時期は人によって様々だ。これは無意識のうちに選択している場合もあれば、意識的に選択する場合もある。僕は後者だった。だめなパターンの方だ。

目を逸らすか。
向き合うか。

人間という養分を吸って膨張を続ける世界。そんな世界と向き合うことを、僕は選んだ。その選択には意味と価値があると思った。でもそれは間違った選択だった。正解は、目を逸らすことだった。僕は間違ってしまった。続く道の向こうに見えたのは絶

望的な風景だった。無知蒙昧な正直者が馬鹿を見ただけだったと気づき、そして静かなる地獄の始まりを知った。

ピシリッ、という嫌な音が頭の中で鳴った。何かに罅が入ったような音だった。その音を聞いた日に僕が覚えているのは、たったひとつだけだ。

それは——冗談のように、青い空。

「自分と世界を飛躍的に直結させて考える行為は、直面している現実という怪物から目を逸らし、ありもしない逃走経路を探し回ることと同じことだ」

幼馴染にしてペシミストの背美弓弦が、僕の部屋に来て枕元に立つなり、そんなことを言った。

中学や高校の頃は周囲の人間に『自分は朝が弱いが幼馴染が毎朝起こしに来てくれる』と話すと羨ましそうに顔をされたものだが、その幼馴染が男だと話すと、ほとんどの人は途端に興味を失ったような顔をすると同時に、現実ってそんなもんだよな、と

いう顔をした。弓弦は小柄で顔立ちも中性的だがれつきとした男だし、その性格は見ようによっては誰よりも男らしいのかもしれないけれど、耳を覆い隠すほどに伸びた金色の髪は確実に彼から男らしさを奪っていた。だが、弓弦はその金色の髪を愛しており、だからあまり髪を切りたくないのだ、と聞かされたことがある。そういうやつだ。

「やあ弓弦」僕は身体を起こす。「おはよう」まだ意識が覚醒しきっていない。「二十歳になっても、やっぱり朝はだめだな」

「さらに、寝不足か？」

「寝不足？ どうして？」

「目の下に隈ができてる」

「目の周りの血行が悪いんだ」僕は指先で何度か目の下を軽く揉んだ。「一応、そういうことにしておいてくれないか」欠伸を噛み殺す。「頼むよ」

昔、弓弦は今よりもっとひ弱で病弱で、そのく

せ気に障ることがあるとすぐ相手に突つかかっていた。学校は休みがちだったが、たまたまに登校すると誰かと必ず衝突していた。彼は細身で背も低く、またその体格差を埋めることができるほどの何かを持っているわけでもなかった。弓弦が得意としたのは、彼の目に映る世界に蔓延った似非を暴くための精神的暴力だけで、肉体的暴力に関してはまるっきりの無力といつてよかった。弱いくせに吠えかかってくる犬が気に入らないという人間は、見渡せばいくらでもいた。そしてその吠え方に真実が内包されていなければならないほど、彼らの神経は乱された。弓弦はなんの迷いもなく、弾劾するようにつえ続けた。その矛先を向けられた人々は、彼を深く憎んだ。だから、弓弦は揉め事に巻き込まれてばかりだった。もちろん、それは自業自得でもあるけれど、

ところで、荒事に向かない体格の弓弦とは対極的に、僕は体格に恵まれていた。そして幸か不幸か、僕には肉体的暴力のセンスが備わっていた。好きか

嫌いかでいえばもちろん嫌いだったが、得意か苦手かでいえば圧倒的に得意だったと言っているだろうか。僕は、決して望むだけを与えるわけではない。つまり何が言いたいのかといえば、僕は結果として幼馴染の弓弦の代わりに肉体的暴力を振るわざるをえなかった、ということだ。半分は仲裁的な話し合いでどうにかなったが、残りの半分がだめだった。ただ、殴るほど、蹴るほど、自分が強くなっていくのが分かった。このまま強くなったら自分は一体どうなってしまうのだろうと不安になったことすらあった。けれど一度として肉体的暴力を振るうことに対して喜びを覚えたことはなかった。それでも、弓弦が誰かに理不尽な暴力を振るわれそうになるたび、僕は幼馴染を助けざるをえなかった。彼を見捨てるという選択肢はなかった。また精神的暴力をやめるよう彼を諭すこともしなかった。なぜなら、彼の振るう精神的暴力に対して僕は一種の好意を持っているからだ。それに、一部のクラスメイトたちが弓弦

の側に気持ちを置いていたのを僕は知っていた。背美弓弦は、ある意味において、人々の代弁者だった。だけど、それだって、すでに昔の話だ。かつて病弱だった弓弦は市内の大学で図書館司書になるための勉強に勤しみ、僕といえ、もう二十歳にもなったというのに、今も世界との距離感に戸惑っている。僕と弓弦。それぞれに変化はあった。変化の波は誰にでも訪れる。望むと望まざるとに、かかわらず。

駅に向かうバスの中で弓弦と並んでシートに座りながら、僕は桜の花びらがくるくると舞う様子を窓から眺めていた。桜は好きだ。毒々しくて。隣で新しいものの好きの弓弦が最近発売されたばかりのタブレット型端末を弄っている。滑らせるように画面の上で指を動かしながら、弓弦が尋ねた。

「何を悩んでる？」

「悩んでる？」僕は言う。「何がだい？」

「分かっていると思うが、おれはちゃんと追及するか

らな？ 幼馴染が悩んでるのにあえてその悩みに触れないことが優しさだと勘違いしてるようなやつがいるとしたら、そいつは真性の阿呆だ。そのうち手遅れになるぜ」

「昔から何かにつけて攻撃的だよな、君は」

「攻撃的じゃなくて、弾効的なんだよ」

弓弦はディスプレイに視線を置いたまま、淡々と言う。足を組んでバスのシートに凭れかかる弓弦はとてもくつろいだ姿勢で座っている。

「世界が加速度的に変化してる」僕は言った。「僕には、そう見える」

「進むだろ、そりゃあ」と弓弦が言う。「ただ、進んでるように見えてその実何も進んじやないっていう間抜けな例は、毎日のように目にしてるけど」弓弦はつけ加える。「おめでたいことだ」

「膨大な情報が毎日のように更新され、押し流され、同時に価値観も目まぐるしく変わっていく。定義や基準も次々と入れ替わり、次第に正確なものとは不確

かなものとの境界が失われていく。その速度が、速すぎるんだ。僕は、その速度についていくことができな。ただ立ち尽くして、戸惑うだけなんだよ。

僕は……この世界を、捉えきれない」

「安心しろ」手元のタブレット型端末を操る指を止め、弓弦が微笑する。「おそらくこの世界には、すべてを捉えきるほどの価値なんか、ありやしない」「いつになっても傍観者気取りの厭世家なんだな、君は」僕は苦笑する。「しっかりと向き合っていないから、世界をより冷たく、ネガティブに見てしまうんだ」

「そうかもしれない。おれは世界つてやつを基本的に信用しちやいなからな」

「君みたいなやつを世間じゃなんて呼ぶか知ってるかい？」

弓弦はくいつと顎を上げると、演技めいた調子で、謳うように言った。

「ピーターパン症候群」

「それは多分、もう古いな」僕は言った。「今は違う呼び名があるんだよ」

「ああ」弓弦がひらひらと手を振る。「知ってる」

「これは、失敬」

弓弦が、こつこつ、と爪でタブレット型端末のディスプレイをつついた。

「ペシミストの言葉つてのは、世界に不健康をもたすだけだ」弓弦が目を眇める。「いいことなんか、何もありやしない」弓弦はタブレット型端末の電源を切った。「時々、それが哀しくなる」

バスが駅に到着した。シートから腰を浮かせ、僕は弓弦に言った。

「変わらないといえ……：：：：：そういえば君、まだ声変わりしてないんだ？」

機嫌を損ねた弓弦と駅のホームで別れると、僕は地下鉄に乗って大学へと向かった。弓弦は声のことを気にしているらしく、そこに触れると途端に機嫌が悪くなる。分かっているつも口に出してしまう

のは僕の悪い癖くせだけれど、しかし、これは厭世的な言葉ばかり口にする幼馴染に對するちよつとした仕返しのようなものなのだ。僕は思っている。ペシミストの不健康な言葉を聞かされる対価と考えれば、それくらいは許されてもいいだろう（一応言っておくと、喧嘩げんかをしてホームで別れたわけではない。こんなのはいつものことだ）。

僕と弓弦は違う大学に通っていた。当初、僕らは同じ大学を受験したのだが、僕の方があっさりと落ちた。ただ、受験を決めた時からそんな気はしていた。弓弦に誘われたから受験してみたが、そもそもそこは僕のような人並みの頭しか持たない人間が受けるようなレベルの大学ではなかったのだ。いわゆる記念受験みたいなものだ。それ以来、たまにこうして互いの講義の時間が合う時に駅まで一緒にバスで行くくらいで、弓弦と過ごす時間は高校の頃に比べて確実に少なくなっている。

大学に着いた僕は、一コマ目の講義が終わった後、

学食へと足を向けた。朝食代わりに注文したカレーライスをトレイに載せ、窓際の席に座る。まだ昼食には早い時間帯なので学食はすいていた。機械的にカレーライスを口に運ぶ。ちゃんと咀嚼そしゃくし、水で胃に流し込む。それを繰り返す。

ふと手が止まる。手元のスプーンに視線を落とす。なんだか、最近いつも考えている気がする。これでもいいのだろうか、と。だけど、やっぱり今どき世界と向き合うだなんてのは馬鹿げているし、本当の自分と向き合うだなんてのも馬鹿げている。そんなことを考える時代はすでに九〇年代で幕を閉じていると、誰かが言っていた。そこから十年は、停滞を孕みながらも強引に突き進んだ狂騒的暗黒時代で、表層的なものを得、深層的なものを失った時代だった。そしてこれからは——いや、だから、それが、馬鹿げているのだ。僕はもう考えることをやめたんじゃないか。何もかも、馬鹿馬鹿しい。そう思わなければ、どうにかなってしまふ。

かたつ、と音がした。顔を上げる。

対面の席に、女の子が座っていた。女の子は、背筋をぴんと伸ばして座っていた。長い髪は上質なワインを思わせる深い赤色をしていた。その瞳は眠たげにも見えたが、物事を冷静に見据える明晰さが秘められているようにも見えた。

「はじめまして」女の子がにこりともせずと言った。

「アリオさん」

声の抑揚は乏しいが、言葉をひとつひとつ丁寧に区切ることを意識した喋り方だ。

いや、そんなことよりも――、

「ひとついいかな？ どうして君は、僕の名前を知っているんだろう？」

「それはわたしがあなたの知り合いの知り合いだからです」彼女が言った。「正確には、知り合いの縁者、という方が正しいのですが」

「縁者？」

「わたし、誰かに似ているとは思いませんか？」

「《誰か》？」僕は彼女を見た。「誰か……」そして思い当たる。「弓弦？」

髪の毛の色は違うけれど、彼女はどことなく弓弦に似ていた。僕は、偽装に気づいた。

「なんだ、悪ふざけか」僕は言った。「変装なんて趣味が悪いよ、弓弦」身体から力が抜ける。「しかも、女の子のふりだなんて」

「失礼です」女の子が、びしゃりとした調子で返してきた。「さすがに、男性と間違われるとは思いませんでした。確かに弓弦さんは女性的な男性ですが、わたしとしては、心外です」

「なんだって？」

「わたし、ここの大学に通う学生です。真っ当な女子大生です」そして彼女は自己紹介をした。「凛といます。鯨辺凛。背美弓弦の従妹といえ、話が早いでしょうか」

夕方。僕は弓弦の家に行った。

「ああ、凜ちゃんか」今日の大学での一件について話すと、特に興味もなさそうな顔で弓弦が言った。

「そういや、お前と同じ大学だったな」弓弦が前髪の手先を弄る。「すっかり、忘れてた」

その後、僕は赤い髪の女の子——鯨辺さんと学食で少し話をした。彼女は法学部に通う学生で、僕よりひとつ年下だった。地元はM県のT市で、今は故郷を離れて一人暮らしをしているのだという。彼女との会話の中身は他愛のないものだったが、しかし、その会話を通して彼女が世の中の物事に対して誠実かつ前向きな姿勢を持った人間であることが分かった。僕の周囲にはいなかったタイプの人間だ。弓弦は厭世的だし、また弓弦の双子の妹は——、とってってってって、と階段を駆け上がってくる足音が聞こえた。その足音の後に、ゆったりとした小さな足音が続く。部屋のドアが開く。

「アーさん！」^{はつらつ}潑刺とした声。「見て！ お化粧したらね、なんということでしょう、女が上がったの

よ！」

弓弦には今年で小学六年生になった双子の妹がいる。背美響^{ひびき}と背美鈴音^{すずね}。瓜二つ^{うりふた}といっているほど、双子の容姿は酷似^{こくじ}している。ただ、僕は二人を簡単に見分けることができる。細かい癖など見分けるポイントはいくらでもあるが、多分僕はもう感覚的に《分かる》ようになってしまっている。彼女たちに限らず、双子を見分けるベストな方法とは——あたりまえすぎて何を言っているのだと呆れられそうだけれど——とにかく、一緒に過ごす時間を積み重ねることだろう。共有した時間の分だけ人は互いを知ることになる。良くも悪くも。

「わたしがやったのよ」響に続いて妹の鈴音が部屋に入ってきた。

双子が並んで立つ。腰まで届くふわりと柔らかい髪は、兄と同じ黄金色の輝きを纏^{まと}っている。透明度の高い南の海を思わせる瞳はやや吊^{つり}り目がちで、その目の上に位置する眉はくつきりとしている。肌は

白磁はくじのように滑らかで白く、ちよつとも上気する
とその頬ほおはいつも桜色に染まった。同年代の中でも
背は低い方らしく、クラスの整列では未だに最前列
か二番目らしい。

「アーさん、どう？ 似合う？」響が僕の膝ひざの上に
乗る。「親からもらつた大事な身体だけど、その鉄
則ガン無視で、これでもかかつて覚悟でお化粧しちゃ
つたんだから！」響が僕を見上げてくる。「これつ
て、提督ていとく並みの決断なのよ!？」

「言葉の使い方が間違つてる」

響が口を尖らせる。

「もうっ！ 微びに入り細さいを穿うがたないの！ めーよ！
そんなことよりアーさん、ガツンと一発、お見舞い
された？ お化粧したわたしを目にした瞬間、びび
つと電撃が走つて『見違えた』『惚ほれ直した』『私の
愛馬は凶暴です』とか思ったんじゃない？」

「流れるにまತ್ತたく意味が通じないのがひとつ混じ
つてたよね」

「もうもうっ、アーさんだったら、いちいち細か
い！」響が両手に作った握り拳でポカポカと僕の胸
を叩く。「細かい細かい細かい！ 無駄無駄無駄
ア！」

「おい、アリオが困つてるだろ、響」

見かねた様子の弓弦が、僕から響を引き剥はがす。

「あーん！ 何すんのよ！ お兄ちゃんの、馬鹿あ
っ！ まだアーさんに褒ほめてもらつてないのに
い！」響が不満の声を上げる。「助けて、鈴音！」

助けを求められた鈴音は、しかしその姉の言葉に
反応することはなく、響の代わりとでもいうように、
無言で僕の膝に座つた。

「鈴音が裏切つた！」響が驚愕きょうがくし目を見開いた。

「カスパーみたいに！」

姉の言葉を無視し、鈴音は先ほど響がしたのと同
じように顔を上げ、囁ささやくような小声で僕に問いかけ
てきた。

「響の化粧の出来、どう？」

「よくできてる」僕は言った。「でも、化粧なんていつから？」

「最近」

「ふーん」僕は感心する。「上手いもんだ」

「ねえ、アーさん」

「ん？」

「わたしもお化粧したら、似合うと思う？」

「似合うと思う。思うけど——」僕は言った。「鈴

音も響も、そのまま十分だと思うな」

鈴音が背中を僕の胸に凭れかけさせ、ぴたりと合わせた細い膝の上で小さな白い手を組む。

「子供扱いしてそう言ってるんだったら、アーさん嫌いよ」

「それは《子供》の定義によると思うよ。そして定義とはいつも曖昧なものなんだ。この時代では、特に。価値観が多様になりすぎたせいで、僕らは正しい価値観というものを見失っている。《神》も死んだ。もう誰も僕らに正しい価値基準を与えてはくれ

ない。身勝手な主観をロジックで塗り固めて正当化することが、世界に残された最後の砦なんだよ。そうでなければ、本能的な数の暴力に身を任せるしかない。それが嫌なら、目と耳を塞ぐしかないんだ」

「多分、小学生に話す内容じゃないわ、それ」鈴音が言った。

「今、自分で自分を《子供》扱いしたよ、鈴音」

鈴音が「あ」と口を押さえた。

「本当はきつと、大人も子供もないんだよ」自分でもずるい逃げ方だと思う。「そうやって大人か子供かで考えようとするから、色んなことがいつも複雑になるんだ」

「アーさんって、真面目すぎるのよ」鈴音が言った。

「あと、お兄ちゃんも悪いわ。お兄ちゃん、人の心にとつて悪いことしか言わないから」鈴音が足をぱたぱたと上げ下げした。「アーさん、かわいそう」

僕は曖昧な笑みを浮かべる。とても曖昧な笑み。恐ろしいほど、曖昧な笑みだったはずだ。

鯨辺さんと出会って以来、彼女と過ごす時間が多くなつた。学食で僕がご飯を食べていると彼女が声をかけてくる、というのが基本的な構図だった。そのたびに僕らはやはり他愛のない話をした。話の流れの変化によってシリアスな話題が含まれることもあつたが、彼女と話しているとそういったシリアスな要素はいつも取るに足らない瑣末さまつな問題へとその形を変えた。どうやら彼女にはそのような力が備わっているみたいだった。

ある日、鯨辺さんが言った。

「わたし、あまり弓弦さんのことは好きじゃないです」

僕らは大学の敷地しきちに設置されたベンチで昼食を取っていた。彼女の昼食はサンドイッチとバナナ・オレだった。僕はホットドッグとコカ・コーラという、僕の人生において完璧に近い組み合わせ。これに勝る簡潔かつ最良な組み合わせを、僕は他に知らない。

今日は春らしい陽気で、降り注ぐ柔らかい陽光が学生たちを優しく包み込んでいた。敷地内の桜並木は満開で、それにつられてなのか、学生たちの表情も華やいで見える。

「その……弓弦とは、あまり仲が良くないのかい？」そういえば鯨辺さんの話をした時の弓弦の反応は、素っ気ないものだった。「何か理由が？」

「考え方が、好きじゃないんです」鯨辺さんは、はむっ、とサンドイッチにぱくついた。「あれは、害悪といつてもいいかもしれないね」

「ひどい言われようだ」僕は苦笑する。「だけど、確かに弓弦は物事に対する姿勢が攻撃的だね——いや、弾効的、だったかな」

「あんな生き方をしていると、そのうち、誰も話をまともに聞いてくれなくなります」

「かもしれないね」

鯨辺さんと過ごす時間が増えたのと反比例して、弓弦と過ごす時間はさらに減っていった。僕らの間

に特に何があったというわけではない。だけど、僕と弓弦が共有する時間は誰が見ても明らかかなほどに減っていた。どことなく、弓弦が僕を避けているような気もした。もちろん、それは僕の気のせいかもしれない。あるいは人と人との関係などそういうものなのかもしれない、とも思う。どんなに良い関係性を築いていたとしても、時として緩やかな瓦解は起る。決定的ではないからこそ鮮明な記憶として残ることがなく、自動的にデータが上書きされて綺麗に忘れ去られてしまうような、そんな、静かなる決裂的瓦解が……。なんにせよ、それが人に刻まれた孤独の因子というものなのだろう。

ちなみに双子と過ごす時間の方はというと、こちらは特に変わることはなかった。双子は週に何回も僕の家遊びにやって来た。どんな時でも双子は楽しそうだった。事実、彼女たちの目に映る世界は輝いているのだと思う。彼女たちは世界のあらゆるものを玩具のように思っている節がある。それはそれ

で、羨ましい世界とのつき合い方だった。

僕の目に映る世界でも様々なことが起こっていたが、何もかもが遠い星で起こっている出来事のように思えた。日が経つにつれ睡眠が浅くなり、眠る前と目を覚ました直後には締めつけるような不安感と焦燥感が僕を襲った。どうしてこんな思いをしなくてはならないのだろう、と思った。そう思うたびに僕の頭には鯨辺さんの顔が浮かんだ。弓弦でも双子でもなく、浮かんだのは、鯨辺凜の姿だった。

僕は彼女に対して憧れに近い感情を持っていた。多分、僕は彼女のようになりたかったのだろう。混沌や悪意という名の血液が永久循環するこの陵辱的世界にも決して脅かされない絶対的な領域を己の中に作り上げた彼女こそ、僕にとっての理想の姿——完全なる、戦闘要塞だった。彼女は船べりに手が届いているタイプの人種だった。だが、僕は力なき漂流者でしかなかった。陸地から目を背け続ける、そんな哀れな漂流者でしかなかった。

日に日に自分の中の何かが弱まっていくのを僕は感じていた。眠れない夜が続いたが、さほど気にはならなかった。そのうち、僕は死ぬだろう。まず最初に精神が死に、その後を追うように肉体も死を迎えるのだろう。だから、死ぬ時くらい、ちゃんと笑って死ねたらいいと思う。

僕の頭の片隅かたすみに生まれたのは猿の怪物だった。彼は自らを《ダークモンキー》と呼んだ。失笑もののネーミングセンスだ。彼の存在理由は人間の心の弱い部分を抉えぐり続けることだった。猿は人の心の弱い部分を抉えぐるためのスプーンをいつも手にしていた。彼はスプーンを手にしたまま、ダンスでも踊っているかのように身体を揺らしながら、僕に近寄ってきた。猿は無邪気かつ明確な悪意を持って、僕に言葉を投げかけてくる。

「ウキヤウキヤ！ 無知なくせに知ったかぶって世界を語るなヨ！ 世界イ？ 世界イ？ 世界イ？ 世界イ？」

一体お前が世界の何を知っているっていうんだヨ？ 世界どころか、社会も知らないくせに！ 世界を偉そうに語るナ！ ウッキーツ！ 知ったかぶりは自分のことを棚たなに上げて、いつつもすべてを分かっていたようなこと言いやがる！ そのうえ自己弁護べんごだけは人並み以上ときたもんだ！ 道化もいいところだ！

ウキヤ、ウキヤウキヤウキヤツ！ しかし弱者の自意識は変わらないナ！ 何年やっつてんだよ、生きるとか死ぬとか自分の価値とか自己と他者とかなんとかをヨ！ ぐるぐるぐるぐるとおんなじことをヨ！ もう終わったんじゃないのかヨ！ 自意識の時代はサ！ まさか、そういうのが気持ちいいのか？ そんなちっぽけな《世界》デ!? おい、なんか喋れヨ！ そんなちっぽけな世界観で、何を語れるっていうんだ？

「……………」

「おつ、黙った！ こいつ、完全に黙ったゾ！ 痛いところ突かれて、惨みじめに黙ったゾ！ ウッキー

ッ！

猿が僕を指差して笑った。スプーンを持った方の手は何かを抉るような動きを繰り返していた。僕は耳を塞ぎ、目を閉じた。僕は何も答えない。

これが『僕』とダンスモンキーのたたかいの始まり――

続きは『Powers Selection - 新走 - 』で!!